

# From university

## ゼミ訪問

第18回

### 東京大学 教養学部 高山ゼミ



写真は毎年恒例の夏合宿の時のもの。

#### 外国語記事の分析で 知識の相対化を図る

高山博教授は、自身のゼミを「学生は大変だと思えますよ」と語る。

留学経験の長い教授が、「日本の授業に物足りなくて始めた」というゼミは、1・2年生各9名の少人数編成だ。学生をヨーロッパ、アメリカ、アジア・アフリカ担当の3地域に分け、毎週、海外メディアの記事を分析・報告させる。また、EU統合や国連問題などの記事が宿題として与えられる。それらを基に学生に討論させるが、

「私がヒントを出すことはほとんどない。何が問題で、何を

論点にすべきか、学生に考えさせる」ため、記事だけでなく、関連文献まで読み込む必要がある。2年間で扱う記事は約130本で、ほとんどが英語。日本語の記事は原則として扱わない。

「日本語のものには普段から触れている。それよりも外国の記事を読むことで知識の相対化ができ、日本と外国のメディアの違いが分かります」。

ハードな授業だが、60〜70人と応募者が殺到する。学生は、「勉強しているという感じがする」物事を考える基礎力があった」と充実している様子だ。中には、「こんな上の世界があるなんて知らななきゃよかった」と笑いながら話す学生も。

「学生時代は一生懸命勉強してほしい。それが自己実現につながりますから」という教授に應えるように、あるOBは「ゼミは修了したがこれで終わりではなく、高山ゼミという出発点を得た」と振り返る。

求めるレベルは高い。成績が悪い者は容赦なく辞めさせる。そんな厳しさの一方、ゼミ生について語る高山教授は、「この子たちは優秀です」と目を細めていた。